

〈研究報告〉

コンコーネ40番練習曲集の歌唱法（その1）

田島達也 信州大学教育学部芸術教育講座

キーワード：発声法、表現法、発声教材、低声

1. はじめに

コンコーネ (Giuseppe Concone, 1801~1861) の声楽練習曲集といえば, Op. 9 の「50 番練習曲集」が有名だが, バスやバリトンの声域の練習曲として, Op. 17 の「40 番練習曲集」(以下「40 番」とする) も存在する。この練習曲集は, 日本では全音楽譜出版社から刊行され, 比較的入手は簡単である。本稿では, 40 番を練習するにあたっての練習法や注意点について考察を行っていく。

2. コンコーネ声楽練習曲集を学ぶ目的

まず, コンコーネの声楽練習曲集を学ぶ意義だが, 大きく考えて2つある。もっとも大きなものとして, 発声法の練習ということがいえる。もう1つは, 歌唱表現の勉強である。このように書くと, これらを別々に考えて勉強してしまいがちだが, 発声法と音楽表現は表裏一体のものであり, お互いを関連付けて勉強することが大切である。コンコーネの声楽練習曲集では, これらが非常に効率的に勉強できるところに価値がある。

コンコーネを学ぶ人が注意しなければならないこととして, 歌唱の旋律は暗譜するくらいまで歌いこまなければならない, ということが挙げられる。ソルフェージュの課題をこなすような練習法では, 決して発声法の練習にはならない。和声感や拍子感他を感じながら, あくまでも発声法の練習課題として, 声帯での声の鳴り方や横隔膜での支え, 声の響きを感じる場所などをはじめとして, さまざまな発声技法を考えながら取り組まなければならない。

また, コンコーネの声楽練習曲集は, 一度練習したからもう終わり, ではなくて, 声作りや声を調整する教材として生涯付き合うべきものである。声楽初心者は, これらの曲集を声づくりの教材として用いるわけだが, 一度それを通過した人も, さまざまな発声上のテクニックや発声法の調整のため, それに適した曲を選び, 繰り返し練習するべきものである。

冒頭で, コンコーネの声楽練習曲集には, 40 番の他に, より広く用いられている 50 番練習曲集が存在することを述べた (コンコーネ声楽練習曲集には, この他に, 15 番練習曲集や 25 番練習曲集も存在する)。この 50 番練習曲集には低声用も出版されているが, 難易度としては, 平均化するとこの 40 番のほうが難しいといえる。40 番は 50 番に比べ, 声域が

低音域にかけて広く、またアジリタの技巧も難易度がかなり上がっている。よって、初心者はまず、50 番練習曲集を通して基本的な発声法やレガート唱法などを学び、それらの技法を発展させる目的で 40 番を学ぶとよいだろう。具体的なことは、各曲の解説で述べたい。

3. 正しい発声法とはどのようなものか

コンコーネは発声法の向上のために使用される教材であると述べたが、正しい発声法とはどのようなものかを細かく考えていきたい。

3.1 美しい声

美しい声・響きの豊かな声で歌える発声法であることが挙げられる。のどをつめた声や、力で押した声ではそうした声にはならない。声の美しさを言葉で表現することは難しいが、やはり、のどが開いた状態で歌唱したり、横隔膜での支えを意識したりすることは、正しい方向性であるといえる。この、のどが開いた状態、というものを専門的な言葉で説明すれば、喉頭の位置は下げ、軟口蓋は若干上へ広がった状態である。また、舌は力を抜き、平らになっていなければならない。これは、ちょうどあくびをするときの状態と似ており、口の中の容積を大きく感じることができる。この、のどが開いた声により、柔らかく豊かな響きが生まれる。

3.2 レガート唱法

レガートで歌うことは歌唱法の基本である。案外無頓着にされていることが多いが、横隔膜の継続的な保持ともからむ、重要な技術である。

3.3 マルカートやスタッカートの唱法

マルカートやスタッカートの唱法が、正しく出来なければならない。間違った方法として、のどをつめて行ってしまう場合があるが、横隔膜で息をしっかりと支え、のどは開放した状態で行う必要がある。

3.4 アジリタ唱法

これは、メリスマやコロラトゥーラなどとも称されることがあるが、日本語では装飾歌唱といい、言葉の 1 音節にたくさんの音符が記譜されているものを歌いこなすことや、その技法を指す。この技法は、バスやバリトンといった低声歌手が苦手とする場合が多いが、持っていないと歌唱に不自由をきたす場合もある。例えば、ヘンデルやロッシーニなどのアリアでは、この技法がないと正しく歌えない曲も多い。苦手とする原因は、人によってそれぞれであるが、声を重くしすぎたり、押しすぎたりということが代表的なこととして考えられる。低声の人は、必要以上に響きを落としてしまうことがあるのである。バスの声域の人でも、横隔膜の支えとともに、声をあてるポジションを高く保つ意識が必要であり、これらがアジリタをこなすために必須だといえる。

3.5 声区のスムーズな変換

この声区の変換というのは、特に男性にとって難しいものである。これができないと、たとえばバスの声種の場合、高い D や Dis あたりで声があがり張ったりわめいたりする感じに

なり、音域的にもそれ以上ほとんど広がらない。高音のことをイタリア語で「acuto」というが、直訳すると「鋭い」という意味である。高音で声区の変換が正しく行われた場合、声の響きは頭上のある一点に集中する感覚があり、acuto とはそのことを表している。この技法を習得するのに必要なことは、おもに2点ある。横隔膜の支えとどの開放である。この2点がお互い関連し合って正しい高音発声法を導くのである。

3.6 1息での長い歌唱時間

ブレスの長さに関してだが、これにかかわる観点としては2点ある。声帯での効率的で無駄のない声の鳴りと、横隔膜での呼気の支えである。

3.7 素早いブレス

これと関係することで最も重要なことは、横隔膜の支えである。ブレスは、吸うというより自然に入り込む感じである。横隔膜が下へ下げられたことで負圧が生じ、その負圧で空気が引き込まれるような感覚で行われなければならない。

このように、正しい発声法を考えると、さまざまな要素が浮かぶ。コンコーネの各曲には、これらの要素の中のいくつかがそれぞれ含まれ、練習する者はそれらの要素を読み取り、取り組まなければならない。

本稿では、特にコンコーネ 40 番を勉強する人たちのために、音楽表現も考慮しながら、そうした発声法上や呼吸法上に注意すべき点を述べていきたい。

4. 各曲の解説

これからコンコーネ 40 番練習曲集の各曲について、練習時の注意点を述べていきたい。手元に、全音楽譜出版社から刊行されている楽譜を置きながら、本稿を参照していただきたい。また、40 番の練習方法として、母音で行う場合と階名で行う場合の2通りのやり方がある。基本的に、「ア」母音が適切で、さらにいえば、イタリア語の開口母音「A」のような明るい響きの「ア」である。ただし、平べったい声にはならないように注意したい。この母音は共鳴腔をもっとも広く感じる音であり、のどが開いた感覚をつかむのに最も適していると思われる。他の母音は、正しい「ア」の感覚をつかんだ後に行うとよい。階名での練習もより実践に近いという意味で価値がある。特にレガート唱法で、母音の差異によって響きの質感に差がでないようにするための練習法としてはよいと思う。ただし、階名唱法はアジリタの練習には適さない。

これから述べていくにあたって、特別な断りがない限り「ア」母音で練習をすることとして話を進めていきたい。

1 番

低い B から始まり、声量の指示はないが、頑張りすぎて押したようにならないようにし

なければならない。しっかり口ものども開けて、声のあたる位置を高めに感じて歌いたい。この曲は、基本的にレガート唱法の練習曲であり、2小節を最小単位として曲が構成されているが、その中で音楽の抑揚もしっかり感じたい。7小節目で高いDがでてくる。初心者でも声域的な問題は少ないと思われるが、問題はだし方である。決して突っ張った声にならないようにしなければならない。横隔膜での支えと、のどの開放を第一に考え、初心者は声量がなかったり息が混じった感じになったりしても気にしないで、前記のことをしっかり考えるべきである。見落とされがちであるが、このDにつながる重要な音は、1小節前のBである。Bを何も考えずにだすと支えの感じられない平べったい声になるが、そうなるとこのDは正しく発声できないことが多い。Bの段階で支え直し、のどをあくびのようにしっかり開けることを実行しなければならない。10小節目で低いFがでてくる。これは完全にバスやバスバリトン用のメロディである。バリトンでも高めの声の人は、上に書かれているオプションパートの方を歌うとよい。この40番練習曲集は、イタリアのRicordi社よりバスとバリトンのための練習曲集として出版されているが、どちらかといえば、よりバス用の練習曲としての傾向が強いと思われる。最高音はDからEがほとんどで、これはバス歌手のパスサッジョ（注1）の音域にあたる。バリトンの場合、この音域はあと半音程度上へ移行することが多い。

2番

この曲も基本的にレガートの練習曲で、2小節が1単位である。はじめの2小節とそれ以後同じような音形のところで注意すべきことが2つある。1つは、2拍目裏と4拍目裏の16分音符がべったりしないようにすることである。2小節全体ではレガートだが、この16分音符は軽いマルカートで歌わなければならない。2つ目は、まず2小節目ででてくる3拍目のCの発声法である。この音を硬く押さないようにほしい。そのために、やはり横隔膜の支えと、のどの開放が必要である。13小節目には、高いEsがでてくる。この音も突っ張らないように発声したいが、これを行うのに重要な音が、同じ小節の1拍目の音であるBである。この音で、声の響きが落ちていたり、のどが開いていなかったりすると、当然高音は正しく発声できない。

3番

この曲もレガートの練習曲だが、音の跳躍の処理が難しい。音程の上下によって、声の響きの方向性まで不自然に上下してはいけない。声量は「ピアノ」の指示があるが、まさにそれを守って、低音は口をしっかり開け、声帯をマッサージするような明るい声で歌い、高音は突っ張ってフォルテになってしまうのではなく、支えなどをしっかり意識し、やわらかく丸い音色を求めたい。

4番

この曲は、スタッカートと音の跳躍の練習曲である。また、シンコペーションが多用され、しかもその音にアクセントがついているので注意したい。スタッカート記号は11小節以降記載されていないが、5小節目に *simile* とあるので、その後もあるものとして同様に歌っていく。スタッカートと音の跳躍ということで、声を軽くするのに適した曲である。バスなど低声用の曲なのに声を軽くするとは矛盾するように感じるかもしれないが、これは重要なことである。楽曲によっては、バスの曲であってもアジリタの技法を要求される曲はたくさんあり、これらを正しく歌うためには、声を軽く感じる、あるいは響きを高く感じるというテクニックは必須のものである。ここで勘違いしたくないのは、どっしりとした横隔膜の支えまで上へ上げてしまったり、無くしたりしてしまうものではないことである。

スタッカートと音の跳躍において重要なことは、のどがしっかり開いていることである。声量はそれほど意識することなく、横隔膜に支えられた息にのせて、軽やかに少し遊び心を入れるくらいの感じで歌ってよい。問題は、シンコペーションとなる1拍目裏の音で、この音にはアクセント記号が書いてある。低い Gis や H のアクセント処理が難しく、ともすると声を押して重くする傾向になるが、そうではなく、明るい響きで声帯をマッサージするような声の使い方、少しずつ声の鳴りが強くなるよう鍛錬を積んでいきたい。

38小節目には、この練習曲中で最高音の E が書かれ、同時にオプションとして1オクターブ低い音も書かれている。バスの人で、特に初心者の場合、この音は非常に困難を伴うかもしれないが、克服したい。1番のところで述べたが、バスの場合、パッサッジの音域が高い D から Es であり、E では完全に頭声にならなければならない。しかし、その技術が確立されていない場合、その音を出したり正しく発声したりすることは難しいと考えられる。よって、まず体得すべき音域は D から Es あたりで、ここがクリアできると自然にそれ以上の音域も歌えるようになるだろう。この E という音は、完全にバスの音域に含まれているので、長い時間がかかっても、しっかりと声で歌えるように身につけなければならない。

5番

歌い始めて3小節目に8分休符があるが、ここは休みではなく、短いブレスの時間と考えたい。なぜなら、次の3小節を含めて1フレーズととらえるべきだからである。そこで重要になるのが、歌い始めて3小節目の C である。支えがなくなって響きが落ちたり、短く切れたりしないようにしたい。同じ小節の高い D だが、バスと思われる低い声の人は、胸声から頭声への声区の変換を意識することが必要になってくると思われる。それを意識しないと、かなり押した発声で声をだすことになってしまう。Energico (力強く) と指示があるが、特に初心者ではあまりその指示を意識し過ぎることなく、多少声の力強さには欠けても、横隔膜の支えとどの開放を第一に考えるべきである。

19小節目以降に、4分音符にアクセント記号が付されている箇所があるが、ここの発声

も決して声を押した感じで行ってはならない。また、21小節には、高いEを1小節分のばす箇所がある。ここは、オプションでなく、音域の低い旋律も書かれているので、練習する人の技術レベルに応じて選びたい。ただし、バス用の曲でもこの音は常用されるものであり、しっかりした技術を身につけたい。

6番

この曲も基本的にレガート唱法の練習が主たる目的である。そして、他のレガートの曲でも同じことが言えることが多いのだが、歌い始めも含めて、声量はピアノが多用されるということがいえる。この意味することは、声量をだそうとするが故に、のどをしめて頑張ってしまうたり、声を押して発声してしまったりして、硬い声質にならないように練習するためである。

歌い始めは、腹式呼吸で吸った息をしっかり支え、呼気で声帯をマッサージする感じの柔らかい響きを意識して歌うことが大切である。歌い始めて4小節目に8分休符があるが、ここは意外と短時間であり、しっかりプレスを行うことは難しい。体が動いたり吸気音が大きく出たりしないように処理したい。呼吸にも横隔膜の支えは関係があり、直前の歌唱でしっかり支えられていた場合、素早い呼吸が正しくできることが多い。

14小節目には、本格的なアジリタとはいえないが、8分音符の連なった細かい音の連なりがでてくる。これは4小節で1つのフレーズを形作り、全体にレガートの記号が付されている。1拍が96の速さなので、勢いを感じながら歌うことになるが、決して音程がすべってはいけぬ。1つ1つの音がしっかり独立して聴こえることと、レガートな全体のまとまりを両立させたい。このような細かい音の練習は、まずはしっかり支えられた小さい声で始めるとよい。そして、声の焦点も広がりを感じるのではなく、額の前あたりの1点に響きを集中させる感覚が必要である。

7番

40番では初めての6拍子の曲となる。2拍子として感じながら歌いたい。歌い始めはdolceと指示があるので、声量としてはピアノでよい。この曲の歌唱でまず考えることは、最初の小節にあるような3拍目や6拍目にある8分休符の処理の仕方である。これらの休符では、決して横隔膜の支えを抜いてはいけぬ。基本的に4小節が1フレーズであり、そのことを意識しなければならない。この8分休符のところは、休符なので当然音はないが、心の中では音楽が前向きに流れていることを十分に感じる必要がある。

25小節目から長調になり、やはり4小節が1フレーズである。ここは音階構成音を1つずつ上行していくが、最後の4小節目のフレーズに頂点があり、しかも音は高いDとなっている。ここを、クレッシェンドしながら、しかもこのDをよい声で歌唱することは難しい。まずはプレスをしっかり行うとともに、ピアノくらいの小さい声から歌い始めてよいので、しっかり横隔膜の支えを意識していきたい。

41小節目には、EからCisという長6度の上向形の跳躍がある。ここで重要なことは、始めのEの発声である。この音は低い音なので簡単に歌唱できるが、この音は無頓着にだすと次の高いCisやDが声質的に悪くなるばかりでなく、このフレーズの持つレガートな音の流れまで阻害してしまう。このEは、音の跳躍を意識し、響きを高めを感じる声で歌うとよい。

8番

Lento Maestosoと曲頭に指示があるように、ゆっくりと、しかも堂々とした感じの曲である。この曲には細かいリズムの動きはなく、幅広い音域と音程の跳躍がある。こうした曲で低声の人が陥りやすいことは、声が重くなりすぎることがあることである。理想的には力強い声で朗々と歌い上げる感じの曲だが、特に初心者はそれを意識しすぎて、声を押し過ぎたりしないよう注意が必要である。また、4小節目や20小節目には、下降形のリズムにアクセントが付されている。下降形は上向形に比べ、リズムや音程の面で平面的に流れてしまう傾向があるが、そうならないよう注意させる指示と解釈できる。

9番

この曲は、たっぷりとしたレガートで歌うとともに、フレーズィングにも気をつけたい。最も小さい単位は2小節であり、特に2小節目の1拍目に軽い頂点を感じるように歌唱しなければならないことが多い。フレーズをさらに大きくとらえれば、2小節×2の4小節となる。そこで重要となることは、たとえば6小節目の高いDの発声法や音楽の推進力である。この音は、しっかり支えられた柔らかい響きで歌うとともに、次の小節に向けて音楽が重くなってはならない。また、7小節目の2拍目の高いCだが、本来弱拍にあたるが、ここはシンコペーションとなっており、表現としてその意識が必要である。

15～18小節目だが、ここも音楽の構成を考える必要がある。17小節から、この曲の歌いだしと同じメロディとなり、また短調から長調への転調もある。それらを表現するために、16小節目の音楽は幾分ゆったりとたっぷりと感じる必要がある。また、17小節1拍目の2分音符のAであるが、できるだけ2拍分しっかり伸ばしたうえでブレスをとりたい。さもないと、この曲のテーマとなるメロディが感じ取れなくなる可能性がある。そのために、このブレスは非常に短時間で行う必要があり、そのときに体が動いたり、大きな音（吸気音）がしたりしないように注意しなければならない。

10番

この曲は、スタッカートとレガートが場面によって使い分けられている。スタッカート部は、快活な3拍子の伴奏にのって1オクターブに及ぶ跳躍を正しく演奏しなければならない。ここで注意すべきは、跳躍後の高い音のだし方で、決して声を押ししたりのどをつめて発声したりしてはならない。どの音も口をしっかり開けあくびのような状態で発声しなけ

ればならない。その時、横隔膜の支えが重要であることはいうまでもない。それを行うとき気をつけるのは、声量についてである。簡単に言えば、あまり大きな声を求めてはならない。楽譜では、メゾピアノあるいはピアノと指示されているが、要はフォルテやフォルティッシモではない、ということである。ここで重要なのは、のどのフォームや筋力の使い方という問題であり、声量ではない。声量は後から自然とついてくるものである。

レガート部であるが、これまでのレガート唱法と比較してとりたてて言うべきことはないが、長調の中に短調の部分も含まれている。そのあたりの和声感も感じて歌うとよい。

11 番

8分の6拍子であり、1小節を2拍にとらえるとともに、音楽を明るくのどかな感じで表現したい。4小節が1フレーズであり、これをノンプレスで歌うことは、初心者の場合難しいこともありうる。その場合、プレス記号の位置でプレスをとるが、できるだけ一息でいけるように勉強していきたい。そのときの注意点として、声量はピアノくらいの小さな声から始めることである。しかし勘違いしてほしくないことは、どの曲でもそうだが、緊張感や筋力を抜いて小さく歌うことではない、ということである。声を横隔膜で支え、声のひびきや艶は常に意識して歌うことが重要である。

20小節目で、それまでのへ長調から変イ長調に転調する。それに先立つ2小節目、高いCをのぼすが、喉頭の位置を下げ、共鳴腔を広く感じて、豊かな響きとともに歌えるとよい。それがうまくいけば、変イ長調の若干高音域に書かれたその後のパッセージも問題なく正しく歌唱できると思われる。この高いCの声が、自由度のない硬い響きで歌われたならば、たとえこの曲はなんとか歌えたとしても、さらに高音域のDやEではわめきになってしまう可能性が高い。

曲の最後の音は、低いFである。この音はバス歌手にとっても最低音に近く、バリトンやハイバリトンにとっては低すぎるので、その場合はオプションで上部に書かれた小さい音符を歌うとよい。しかしその場合、バリトンにとってこの曲のテシトゥーラ(注2)は若干低く、よりバスの人にとって効果のある曲といえる。

12 番

この曲はレガートの練習も含まれているが、テンポが108と速めで、指示として *con moto* (動きをもって) も付されている。よって、たっぷりとしたレガートではなく、少し軽快な感じを残したレガートである。さらにいうと、この曲は6度音程までの跳躍も多用されているが、そうした時に高い音が不自然に飛び出した感じになったり、硬く突っ張った声になったりしないで、中音域を歌うような柔軟な声質とともに軽快に表現できるようにしなければならない。

また、この速さとも関連することとして、この曲ではプレスに要せる時間が比較的短い箇所が多い。素早い呼吸法は正しい発声法と関連があり、特に横隔膜でしっかり支えられ

た歌唱である場合、プレスも短時間で効率的に行えることが多い。腹式呼吸とは横隔膜呼吸のことであり、正しい呼吸とは、横隔膜を下げることにより、負圧で自然に肺に空気が入るかのような呼吸である。

13番

8分の12拍子の曲であり、4拍子に感じて歌う。基本的にすべてレガートで曲が構成されていて、4小節が1フレーズである。1フレーズには、一度ないしは二度のプレスが可能だが、当然一度のみのプレスで歌っていけるように訓練すべきである。そして、これらのプレスだが、前曲同様、短時間で体が不自然に動くことなしに行われなければならない。

17小節目から18小節目にかけて、高いCを1小節半のぼすところがある。ここは、のどのフォームをしっかり意識しなければならない。横隔膜の支えとどの開放をしっかり行った上で呼気圧を高めていき、クレシェンドができれば、より理想的な歌唱に近づいているといえる。

27小節目には、高いEsがでてくる。バス系の方は、この音は完全に頭声で歌わなければならない。楽譜にはクレシェンドが付されているが、特に初心者ではそれをあまり意識することなく、横隔膜に支えられた柔らかい声を意識して歌うほうが高音の発声の感覚を得やすいと思う。正しい高音の発声法が身につけてきたら、徐々にクレシェンドを加えていき、ドラマティックな表現もできるようにしていく、という段階を踏んでいきたい。

14番

この14番は、13番までと比較すると、はるかに難しい曲である。基本はレガート唱法を学ぶ曲であるが、そこに非常に広い音程の跳躍が含まれている。声楽の場合器楽と違い、そこに声区の変換、あるいは音域に合った発声法を考えていかないと、とてもではないが音楽的な演奏は成り立たない。まず低音だが、この曲の場合最低音は低いAsであり、それだけ取り出せばそれほど難しくはないのかもしれないが、ここでは他の音と同様に短時間で次の音へ移行することが多く、また1オクターブにも及ぶ音程の跳躍もある。こうした低音の歌唱で重要なことは、響きを落とさないで歌うことである。低音はどうしても声が重くなってしまうことが多いが、そうではなく、1オクターブ上の音を歌唱するときの響きを保って歌わなければならない。

24小節には高いEsがでてくる。こうした高音の発声法については何度も書いてきたので繰り返さないが、この音を階名で歌うとミで歌うこととなる。ミは母音としてはイとなるが、これについては気をつけないといけない。イ母音は、のどがもっとも締めやすい音なのである。練習の段階としては、まずア母音で、のどの開放をしっかり学び、その後階名で歌うとよいだろう。

15 番

この曲も 14 番と同様、音程が非常に広いことが特徴である。このことは、50 番練習曲集には見られないことである。曲は, *deciso* (硬めに) と指示された部分と, 18 小節目からの *dolce un poco meno mosso* の部分の, 2 つに分けられる。はじめの *deciso* 部で特に重要なことは、声区の正しい変換である。この部分は特に音程の跳躍が大きい。ここをなにも考えずに歌唱すると、高音部はわめいた感じになり、低音部は響きが落ちた状態になりやすい。これでは、音程の上下によって音楽の情感まで変化してしまい、音楽的な表現となりにくい。大切なこととして 1 つ述べたいことは、歌い始めの音の音量についてである。*Deciso* やアクセント記号などがあり、ともするとフォルテやフォルティッシモになりがちな傾向にある。しかし、ここではそうした声量に関することよりも、発声法についての体の使い方や響きの位置といったものを意識すべきであり、のどの開いた合理的で無理のない発声法を体得することが第一である。

dolce un poco meno mosso 部からは音量がピアノとなり、音楽がよりレガートになる。この部分も若干跳躍があり重要だが、それとともに重要なこととしてレガート唱法について述べておきたい。基本的に 2 小節で 1 フレーズを形成するが、フレーズの終わりまで支えをしっかりと意識することが重要である。フレーズの終わりの音は、高音・低音さまざまであるが、高音はわめきのようにならないようにしなければいけないし、低音も響きが落ちないように横隔膜の支えをしっかりと意識しなければならない。

16 番

この曲で初めてでてくる要素が、メッツォスタッカートである。メッツォスタッカートは、スタッカートほど跳ねることはなく、まさに半分のスタッカートである。よって、声量はあくまでピアノで、やわらかく明るい響きとともに歌唱していかなければならない。さらに 8 分の 6 拍子という 2 拍子を感じながら軽快に歌えるとよい。注意することとして、低音の処理がある。低音は、重くすることなく中音域を歌うときの響きの位置を保った状態で歌唱しなければならない。それにより、声帯の自然な鳴りを体得でき、ひいては明るく響きの豊かな声が得られる。声は重くすることは簡単だが、明るく響きの豊かな声で歌うのは難しいことである。

16 小節目の *Dis* とそれにつづく *E* は、次に現れる 6 度の跳躍をしっかりと意識し歌いだす。17 小節目の 2 拍目の高い *Cis* が必要以上に飛び出さないように意識することが必要である。

17 番

2 小節が 1 つのまとまりとして書かれているが、音楽の感じ方としては 4 小節を 1 フレーズとするとよい。その際、8 分休符という比較的短時間でブレスをするが、正しい腹式呼吸で行う。呼吸は、呼吸時だけ注意すればよいのではなく、むしろその前の歌唱時の横隔膜の支えが重要である。横隔膜でしっかり支えられた歌唱の場合、その後の呼吸も正しい腹

式呼吸で行える可能性が高い。

17小節目からの4小節は、上行形音階のように音が連なり、20小節目の高いDへ向かっていく。特にこのDでは、共鳴腔が狭くならないように注意しなければならない。そこへたどり着くまでの3小節間で息が足りなくなる可能性もあるが、支えを意識することはもちろん、声帯で息漏れが少なくなるように意識することで、正しいフォームでしっかり歌えるようにしたい。

18番

この曲は、*cantabile* と指示があるように、レガートの練習曲である。ただ、50番練習曲集をしっかりと勉強した人であれば、それほど難易度として難しいものではない。2箇所を除いて、2小節ずつプレスができ、最高音もDである。この曲は、これまで学んださまざまな発声法を用いながら、音楽表現を学ぶための課題といってよい。技巧的に書かれたわけではないこの曲を、どのように歌唱したら最も音楽的な表現なのか、ということを考えねばならない課題である。

19番

スタッカートと跳躍の練習曲である。冒頭に *dolce e leggero* とあるように、躍動的で軽やかな声で歌うようにしたい。特にバス系の人には低音の響きを落とすすぎる傾向があるので、むしろ自分がテノールにでもなったつもりで軽快に歌いたい。ただし、ここで注意したいのは、ただ単に力を抜いて声を軽くするのではないことである。横隔膜の支えなど、緊張を保つところはそれを行った上で声を軽くしなくてはならない。

25小節目からCdurに転調し、曲調も変わる。声量はピアノで、やはり軽快に歌いたい。ここでは、CからCへの1オクターブの素早い上行跳躍があるが、下から引きずったようにならないで、瞬間的に高いポジションに持っていかなくてはならない。しかし、ここではそうした細かい発声の要素のみを見ていくのではなく、音楽の流れを正しく読み、演奏に活かしていきたい。この25小節目からの2小節を取り出した時、無頓着に歌唱した場合に陥りやすいのが、最も高音のCが必要以上にでてしまうことである。この2小節間で重要な音は、アクセント記号のついた下のCと、次の小節1拍目のAである。最初のCは本来弱拍だが、シンコペーションとなっているため、強拍のようにしっかり音を感じて歌わなければならない。そして、1オクターブ上昇を経ながら、フレーズとして音楽が向かっていく先が、2つめの重要な音、Aである。その後もD.S.まで同じ音形が続くが、フレーズを正しく感じることも発声法を伸長させる為に欠くことのできない要素である。

20番

この曲となり、はじめて装飾歌唱の本格的な練習に入る。ただし、テンポは1拍が92であり、それほど速くない。4小節で1つのレガート記号が付されているが、はじめのうちは

あまりレガートを意識しないほうがよいと思われる。この曲の目的は、アジリタやコロラトゥーラといった技法を学ぶためだが、レガート唱法を意識しすぎるとその目的に近づけない可能性がある。ここではまず、小さくてもよいので明るい声を用い、1つ1つの音の動きがしっかり分かるように勉強すべきである。テンポが92と比較的ゆっくりなのは、まずはゆったりとした流れの中で細かい音の動きを感じて歌うためである。階名で歌うと、1つ1つの音がはっきりするが、ア母音で歌唱したときも、それと同じように音の動きが理解できる歌い方が望ましい。なお、92のテンポでこれを正しく歌唱できる者は、テンポを速めて練習することも価値があるといえる。

この曲のような装飾歌唱を行うために必要なことを文章で説明することは至難の業だが、いくつか書きたい。まずいえることは、重い声や押した声では難しいことが多いことである。声帯で声が自然に鳴り、感覚として声帯を薄く使い発声できたとき、声は軽やかに回ることが多い。高音は、力で押すことを避け、声を軽く感じ、完全な頭声に持っていくことができることよい。ただしこの時、横隔膜の支えはしっかり利いていて、しっかりした支えによって声をより高い位置に持っていく感じである。そして声量についても、はじめはあまり意識することなく、小さい声でもよいので、共鳴が拡声器のように広がる感じではなく、顔面のどこか1点に集中して感じられるような歌い方が望ましい。

5. 結び

コンコーネ40番練習曲集の歌唱法(その1)として、ここまで前半の20曲を取り上げてきた。20番までを概観すると、レガート唱法を中心に学びながら、ところどころにスタッカート唱法が取り入れられている。装飾歌唱については、20番でゆったりした形で現れているが、まだ序章の域をでない。21番以降では、装飾歌唱についてははるかに難易度が高い楽曲が現れるので、そうした技術を中心に学びたい人はさらに先へ進む必要がある。

練習時の注意点についてさまざまなことを述べてきたが、重複する言い方も多々できている。これは、目指すべき目的が同一だからであるが、音楽的構成に違いがあっても、その時々で常に正しい発声法を適用できるよう、さまざまな曲で練習をつむことは大切なことである。

ここまでの発声法で特に重要なことは、響きを落としたり重くしたりすることなく、声が息の上ののった感じの軽やかで明るい声質を体得することである。その技術が、21番以降に現れる装飾歌唱にも結びついてくる。声を重くすることは簡単である。しかし、軽やかで明るく、伸びのある声を正しく出すことは、はるかに難しい。

最後に一つ、重要なことを付け加えたい。本稿を参考に発声技術を高めてほしいが、そのためにはこれを読み考え、練習を行っただけでは不十分である。これらの知識を活かしてだされた声を、よい耳を持った教師に聴いてもらい、アドバイスを受けることが必要であろう。

注

- (1) 経過する部分のことをいう。何を通過するかだが、胸声から頭声への通過である。この部分のことをパッサッジョといい、それは人によって音域が異なる。
- (2) 直訳すると、「織り方」を表す。五線譜の中での音の織り方である。全体的に音が低めに書かれているか、あるいは高めに書かれているか、といった意味である。

参考文献

コンコーネ 40 番低声用, 畑中良輔編, 全音楽譜出版社

(2009年3月3日 受付)

(2009年5月26日 受理)